

研究課題	伝える力を育むタブレット端末の活用について
副題	～児童の伝えたい気持ちを引き出す出会いづくり～
キーワード	タブレット・言語力・遠隔・交流授業
学校/団体名	公立茨木市立太田小学校
所在地	〒567-0017 大阪府茨木市花園1丁目21番26号
ホームページ	https://fa.fureai-cloud.jp/e118/

1. 研究の背景

本校の児童は自分の感想・意見を持つ「伝える力」が弱い傾向が見られる。児童の「伝える力」の育成のため、国語科を中心とした授業研究を進めることで、説明文・物語文を通じての指導方法について、一定の定着を図ることができた。身についてきた「伝える力」を子どもたちが大人になったとき活かせるよう、今後は他教科やタブレット端末を活用した授業についても取り組んでいきたいと考えている。

本校でのタブレット端末の活用においては、昨年度 校内での研修・研究、中学校ブロックを対象とした6学年同時の公開授業等の授業実践を重ねていっておりそこから本校版の情報活用能力育成のためのカリキュラム作成に取り組んでいる途中である。そんな中、学校の環境整備が追いついておらず教職員が理想とする授業実施を行う上で代替えの手法をとったり、学校に配備されている機材で試行錯誤したりしながら取り組んでいる現状がある。

一人1台端末が配備され、それらを十分に活用できる環境整備についての検証を行いつつ、これからの学校にあるべき学校環境と児童の「伝える力」を育成するための授業実践についての研究を進めたいと考えている。

2. 研究の目的

本校の課題である「伝える力」が弱い傾向の改善のため、説明文を通して児童の伝える力を育成できるよう研究を進めてきた。本年度は、伝えるための自分の考えを明確化するために「書く力」に重点を置き研究を進めるとともに、タブレット端末を活用したスピーチ練習や遠隔授業等の取り組みにより、相手を意識した取り組みを進め、「伝える力」の育成に取り組む。

3. 研究の経過

本年度「遠隔交流」をキーワードとして、実施できる取り組みを検討し、実施可能な学年での取り組みを進めた。その中で実施につなげられたのは、4学年・5つの取り組みである。どの取り組みにおいても本校としては初めての相手との実施となるため、相手先との事前調整から始め、子ども達への事前指導、当日の授業へとつなげた。実施にあたってはどの取り組みも最初はZoom等を用いた遠隔実施で提案していたところであるが、相手のご厚意もあり対面実施となった取り組みもあり、遠隔実施と対面実施の違いについても考えることができる機会となった。

4. 代表的な実践

本年度以下の取り組みを行った。そこから見えてきた成果と課題について整理する。

	学年	相手	実施形式	内容
令和6年7月17日(水)	3年	院内学級の児童との交流	遠隔実施	復帰に向けた児童間交流
令和6年8月20日(火)	4年 教員	大阪教育大学 庭山 和貴 氏	遠隔実施	1月の授業にむけた指導案検討
令和6年9月30日(月)	5年	大阪管区气象台	対面実施	気象について
令和6年10月31日(木)	5年	沖縄の小学校 北海道の小学校	遠隔実施	自分たちの地域紹介①
令和6年11月5日(火)	1年 教員	大阪教育大学 住田 勝 氏	遠隔実施	11月の授業にむけた指導案検討
令和6年11月11日(月)	6年	市長	対面実施	自分たちの街の魅力紹介と市をよりよくするための市長への提案
令和7年2月18日(火)	5年	沖縄の小学校 北海道の小学校	遠隔実施	自分たちの地域紹介②
令和7年2月28日(金)	4年	療育園の先生	対面実施	自分の成長

(1) 沖縄・北海道の交流授業（遠隔実施：5年：社会科）

テーマを「自分たちの地域紹介」として実施した。実施にあたっては、沖縄・北海道の学校と事前調整を行い、夏・冬に自分たちの地域紹介を行う交流授業を実施した。学校を探すにあたっては、それぞれの市町村の教育委員会に今回の3校合同授業の趣旨を伝え、協力をいただける学校を紹介いただいた。その後、相手校の担当の方への説明を行い実施につなげることができた。実施にあたっては、最初に教職員間の自己紹介を踏まえた打ち合わせを実施した。その後、①授業実施の1か月前の事前打ち合わせ、②発表資料の動作確認の打ち合わせ、③授業本番として進めた。どの打ち合わせも遠隔で実施し、各校が遠隔授業に慣れられるように努めた。今回は、夏・冬の2回実施としたので、①～③の流れを2回繰り返した。第1回は、各校の紹介、地域の紹介をテーマとして発表した。第2回は、1回目を踏まえお互いの地域への質問事項の交流を行い、それに基づく発表を行った。



児童は、発表当日にむけてタブレット端末を用いてスライド作成を共同で行った。各自で担当のスライドを作成しては班で交流し、クラス発表を行っては、他の児童からのアドバイスをもとに修正しながら発表スライドを作り上げていった。

発表当日は、慣れない画面越しの人との交流に少し戸惑いを感じていた様子であったが、普段以上に熱心に授業に参加することができていた。

実施後の児童からは、「自分の地域に対して沖縄や北海道の子ども達がどのように感じているのかを知ることができた。」「沖縄北海道の小学生との生活の違いを感じることができた。」「自分たちの地域のことについて調べることができた。」等の声があがっていた。

また、保護者からは「どのようにしてつながることができたのか?」「今はこんな授業もできるのですね」等の声をいただいた。現在の保護者の方々が小学生時代には、遠隔交流授業はまだ限られた取り組みであったこともあってか、このような驚きの声を多くいただいた。同様に、授業を参観した教職員からも「面白い取り組みであったがどのようにつながれたのか?」との声があった。

実施にかかわった教職員からは、「子ども達は興味を持ちながら取り組みに参加していた。」「1回目が終わった後、2回目を楽しみにしている姿も見られた。」という肯定的な意見も聞かれた反面、「ICT機器の障害対応が難しかった。」「時間の確保が難しかった。」等の課題についての意見も挙げられた。

3校の教職員間での打ち合わせは、冬の北海道は16時過ぎには真っ暗になり、大阪・沖縄はまだ明るいことに時差のようなものが感じられる場面もあり、教職員間での打ち合わせにおいてもお互いの地域の違いについて交流することができ大人にとっても学びのある時間を過ごすことができた。

(2) 院内学級の児童との交流（遠隔実施：3年）

治療のため3年生の児童が1人、数か月の間、院内学級に転出することとなった。治療も終了しいよいよ学校への復帰が見えてきたが、本人にとっては徐々に学校生活に戻ることへの不安があるようであった。また、学級の子供達からは本人の復帰を楽しみにしている声が上がっていた。



そのことを踏まえて、入院している間の学校の近況報告と復帰にむけての準備のため、保護者との打ち合わせを行い、Zoomを用いた1時間の授業参加を計画した。授業については、緊張もあるため、当初は画面を非表示にしての実施としていた。しかし、本児が思ったより緊張感なく楽しみながら



参加できたこともあり、その後の給食をオンライン給食として実施した。こちらは、教室のモニターに画面を表示しながら、学級全体で一緒に給食を食べた。

子ども達からは、「しばらく入院生活が続いていたが、久しぶりにみんなと話すことができてよかった。」「しばらく会えていなかった子と話せてよかった。画面越しだったけれど面白かった。」等の声が上がっていた。

また、保護者からも「学校復帰にむけて、楽しそうに話している子の様子が見られてよかった。」との声をいただいた。

(3) 大阪管区気象台の職員の方との授業（対面実施：5年：理科）

理科における気象分野は、教室内での実験も難しく抽象的な話を中心となるため、専門として働いておられる大阪管区気象台の職員の方に講話いただけるよう授業を依頼した。当初はZoomでの実施を予定したところであったが、担当職員の方が来校いただけるとのこととなり、対面実施へと変更し授業をおこなった。

授業の実施にあたり、事前に教科書で扱われている内容を共有しながら、児童の状況に応じた授業が実施できるようメール・電話を使いながら打ち合わせを進めた。

授業当日は、打ち合わせした内容をもとに講話いただいた。子ども達は熱心にメモをとりながら職員の方の話を聞いていた。その後、子ども達の質疑に対しては専門家として回答いただき、子ども達の驚きや納得の表情が見られた。

当日授業に参加していた子ども達の振り返りでは「台風が来る前の備えが大切、（断水に備えて）お風呂に水をためる、飲み水を確保する、避難場所を決めておく、飛ぶものをしまう」「台風が来たら家にいる、早めの避難、黒やむらさき色は逃げる！警戒レベル5は今すぐ安全を確保する。キキクルを見る！川の近くは公民館に逃げる。避難するときは、はきなれたくつで動く。」「気象衛星ひまわり、雨雲レーダー、アメダス、天気予報、ネットなどで台風情報をみる。ひざまで水がつかっている場合の避難は危険。」などの記述がみられ、学んだことを自分の生活にどう生かしていくのかという観点まで高めて考えることができていることが確認できた。

その後の単元テストにおいては、他の単元テストと比較して、高得点を取る児童が増えており、専門とされている方との対話と学習内容の定着には関係性があると感じられた。

また、当日講話いただいた職員の方からも「かなり細かいこと（南半球は回り方が逆など）まで書いてくれていて大変感心していますし嬉しいです。」と子ども達の学びの様子についての感心の言葉をいただいた。加えて、質疑応答では当日答えられなかった部分についても後日別途資料をいただくなど事後の展開もあり子ども達の学びをさらに深めることができた。

(4) 市長との交流授業（対面実施：6年：総合）

本校の最高学年として、これまでの小学校生活の学びを活かして、「自分たちの街の魅力紹介と市をよりよくするための市長への提案」を目的として、授業を実施した。この授業実施にあたっては、市役所の秘書課との調整を行い、打ち合わせを進めた。こちらも当初はZoomでの実施を予定していたが、市長よりぜひ対面での声をいただき来校いただいでの実施となった。



授業時間としていただけたのは 45 分。それに対して子どもたちは約 100 名。全員分の発表・提案を聞いていただくことはできない。そこで、各クラス、班ごとに魅力紹介と市長への提案についてのスライドを作成した。その上で、クラス内での選考を実施し、代表の班が当日市長にプレゼンを行うこととした。



授業当日は、市長からの本市について講話いただくとともに、3つの班の発表・提案を聞いていただいた。子ども達の目線で見ると大人が見ているものとは異なり、市長からも「初めて知ることもあった。今後の市政にも取り入れていきたい」との言葉もいただけ、子ども達の満足そうな表情が見られた。

授業後の子ども達からは、「市長に実際に会うことができた。」「市長が自分たちの発表を聞いてコメントをくれたことがうれしかった。」「市長の紹介を聞いて市長の仕事について知ることができた。」等の声が上がっており、小学校生活の学びを活かした授業につながられたのではないかと感じた。

(5) 出身の療育園の先生との交流（対面実施：4年）

4年生では、10歳を迎える年ということで自分の成長を振り返り保護者の方に伝える取り組みを実施した。その取り組みの延長として、以前に療育園に通っていた児童が自分の成長を当時の先生に聞いてもらう授業を計画した。療育園の代表の方に連絡し、実施の可否について確認したところ、すぐに快諾いただけた。こちらからは Zoom での実施を提案したところであったが、せっかくの機会なので来校いただき対面で実施いただけることとなった。この授業の実施にあたっては、保護者の方にも賛同いただき取り組みを進めることができた。



授業は、数週間かけて準備してきたものを元担任の先生の前で発表した。発表中、本人の満足そうな表情が始終見られた。また、参加いただいた先生からも大きく成長した本人の様子を見てたくさんの賞賛の声をいただき、さらに満足そうな本人の表情が見られた。

発表後は、本人と先生との交流の時間を設け、じゃんけんゲームやお相撲ごっこなど対面ならではの交流をたくさん行い、充実した一時を過ごすことができた。

授業後は、参加いただいた先生から、同じように卒園していった他の子についても同じような場があれば嬉しいですとの声をいただいた。本校の職員からもぜひお願いしますとの会話となり、今後も継続して取り組んでいく流れへとつながっていた。



(6) 講師との打ち合わせ（遠隔実施）

児童の取り組みとは異なるが、今年度 Zoom を用いた取り組みを進める中で、教職員の活用についても実施し、研究授業の実施にむけての事前打ち合わせや、校内研修を実施した。

従来、学校における講師の方との対話は、対面での実施が中心であり、来校いただけなければ話すことができなかつた。しかしながら、コロナ禍を踏まえて、大学の先生方はオンラインでの対話は日常業務ではあたりまえのものとなった。その点を活かして、本校では初となる Zoom を用いた講師の先生との打ち合わせを 2 回実施した。

1 つは、研究授業実施の半年前に実施した。難しいテーマでの研究授業であったため、方向性が見定められず悩んでいた段階での実施であった。そのことも踏まえて、大学の先生に相談させていただいたところ、これまでの知見に基づいての助言をいただくことができ、担任陣の展望も開け、着実に取り組みを進めていくことができた。



もう 1 つは、研究授業直前での実施であった。指導案の練上げも終えており、その段階でも十分に子どもたちの成長が見込まれる授業であったが、大学の先生と対話させていただいたところ、もう一步踏み込んだ授業案の発想につなげることができた。



どちらの打ち合わせも 15~30 分の短時間の打ち合わせであったが、本校の教員にとっては新たな授業発想につながる場となっており、貴重な授業力向上の機会にすることができた。

5. 研究の成果

本年度の取り組みを踏まえての成果は以下の 3 点であると考えている。

(1) 子ども達の達成感を生み出す取り組み

各実践内容でも記載した通り、どの取り組みにおいても、本物と交流できる授業は、子ども達が関心・意欲を持って参加している姿が見られた。それにより、子ども達もただ発表するのではなくどうすればよりよく伝えられるだろうかと試行している姿が随所で見られた。

また、授業当日は、子ども達の生き活きとした表情が見られ、普段は発表しない児童が声を上げている姿も見られ、意欲的に取り組みに参加している子ども達の様子も確認できた。

振り返りやテスト結果においても、他の単元とは異なる結果が見られ、単元の学習そのものを充実させることができていた。

授業の前・当日・後とどの場面においても、子ども達の伝えたいという気持ちを生み出す事ができており、改めて本物が持つ力の大きさを確認することができた。

(2) 対面実施の良さ、遠隔実施の良さ

今回の取り組みにおいては、多くの取り組みが Zoom 等を用いた遠隔での実施を予定していたが、相手の方のご厚意もあり対面実施となった取り組みも多くあった。そのことを踏まえて、対面・遠隔のそれぞれの良さを確認することができた。

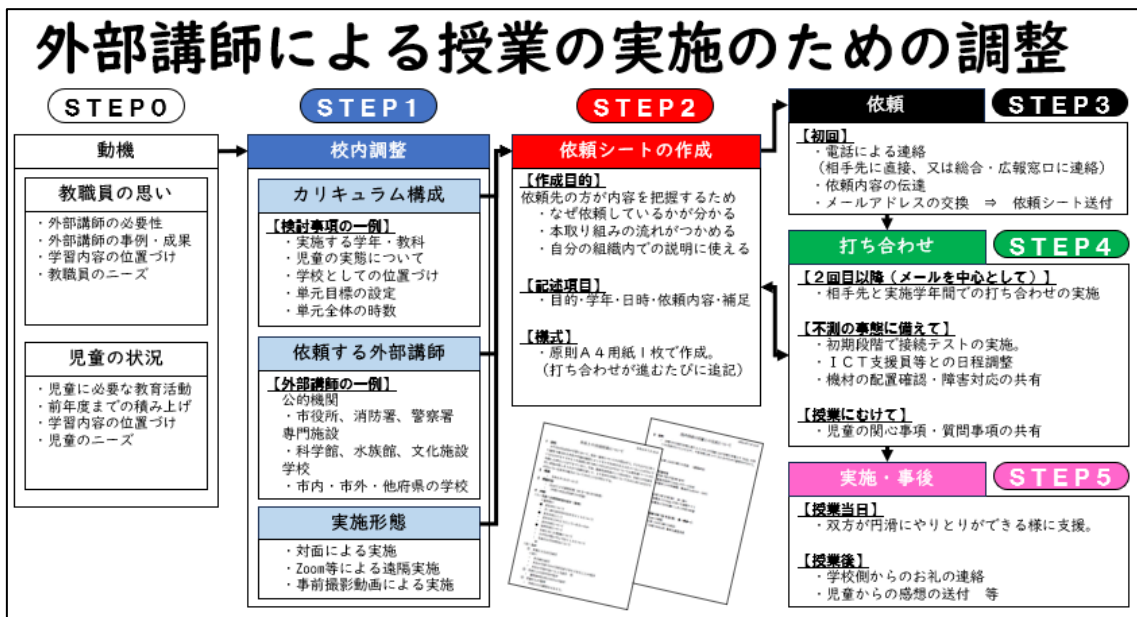
まずは、対面での実施の良さである。1 つは、遠隔では難しい相手とのテンポのよいやり取りがあげられる。同じ場にいる事で、空気感も共有しながら会場全体での双方向のやり取りができる。それにより、互いの距離感も縮まり会話が弾んでいる様子が多く見られた。もう 1 つ

は、ふれあえることである。握手一つにしても、子ども達にとっては得られるものは大きい。

次に、遠隔での実施の良さである。こちらは移動時間を考えず距離にとらわれない取り組みを行えることが最大の良さである。この手法が無ければ、沖縄・北海道との交流は絶対に実現しえない。遠隔での実施を行うことで教室にいながらにして実現することができる。幸いGIGAスクール構想により、日本中どこでも実施が可能となっており、以前に比べてハードルは大きく下がっていると考えている。

(3) 外部講師との調整に関する手順書

交流授業の利点については、多くの先生方が体感も通してつかんでいる。しかしながら、実施につなげられない、どうやったらつながれるのか？といった声もよく耳にする。そのことを踏まえて、今回外部講師の方とつながるための手順書の作成を行った。合わせて依頼書のひな型や連絡窓口の一覧も整理して作成し、つながるためのハードルを下げられるよう資料の作成を行った。資料を提供した方からは、「一連の流れが見えてわかりやすい」「つながるためのポイントがわかってやってみようと感じた」等の声をいただいた。



6. 今後の課題・展望

本年度の取り組みを踏まえて、児童の伝えたい気持ちを引き出す出会いづくりとして、本物との交流の有用性について確認することができた。反面、初めての取り組みであったため、当日にむけて準備に追われてしまった教員の姿も見かけられ、業務を整理しつつ見通しを持った取り組みにしていく必要があると感じた。今後は、本年度の取り組みも踏まえつつ、取り組みの積み上げと系統性についての整理を進め、単発の取り組みではなく探求のサイクルを意識した学校としての取り組みにつなげられるようにしていきたいと考えている。

また、校務においても外部講師との打ち合わせに遠隔実施の手法を取り入れることで、授業力向上につなげていけることを確認することができた。今後にむけては、授業力だけでなく、組織力の向上にもつなげていけるよう活用の方法について検討を進めていきたいと考えてい

る。

7. おわりに

本年度は、子ども達の伝える力を育むために多種多様な取り組みに挑戦してきた。その取り組みに賛同していただいた外部の方々ほどなにも快諾しつつ意欲的に本校の取り組みに協力いただいた。そのおかげもあり、どの取り組みにおいても子どもたちの生き生きとした表情や達成感を感じさせられる取り組みにしていくことができた。十分な打ち合わせが行えず、当日あわただしくなってしまった場面が見られた取り組みもあったが前向きに参加いただいた皆様にこの場をお借りしてお礼を申し上げたい。

8. 参考文献

- ・ 文部科学省 (2018) 『遠隔学習導入ガイドブック 第3版』